

Title	U・アレクシス・ジョンソン著『ジョンソン回顧録』
Sub Title	U. Alexis Johnson with Jef Olivarius McAllister, "The right hand of power : the memoirs of an American diplomat"
Author	木村, 昌人(Kimura, Masato)
Publisher	慶應義塾大学法学研究会
Publication year	1985
Jtitle	法學研究 : 法律・政治・社会 (Journal of law, politics, and sociology). Vol.58, No.9 (1985. 9) ,p.120- 125
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	紹介と批評
Genre	Journal Article
URL	<a href="https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19850928-0120">https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00224504-19850928-0120</a>

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

紹介と批評

U Alexis Johnson with Jef Olivarius McAllister  
*The Right Hand of Power: The memoirs  
of an American diplomat*

New York, Prentice Hall, 1984, 634 pp.

U・アレクシス・ジョンソン 著

『ジョンソン回顧録』

(一)

本書は、戦後アメリカの外交官として活躍したU・アレクシス・ジョンソンの生いたちから一九七七年に國務省を去るまでの半生を描いた第一級の回顧録である。

最近のアメリカ大統領や外交官は、公職を去るとすぐに在職中の成果を誇示したり、または自己弁護のため、回顧録を出版するのが常となっている。こうした風潮の中で、ジョンソンは「陳腐な外交官の回想録ほど読んでいて退屈なものはない」と

考え、今まで回顧録の類はいっさい公表していなかった。しかし、彼のように一九三五年國務省入省以来、退官するまでに、七人の大統領と一〇人の國務長官に仕え、その間数多くのアメリカ外交の重要局面に立会った外交官は珍しく、本書を発行したことの意義は大きい。

ジョンソンが冒頭で述べているように、本書の台本となったのは、彼が孫たちに長い外交官生活で得た体験を伝えようとして吹きこんだ膨大な量のテープである。録音は一九六五年より七七年まで一二年の歳月をかけて行なわれた。したがって本書は六〇〇頁を越す大作となっているが、戦後アメリカ外交の研究には見過ごすことのできないエピソードが次々と語られ、読者を飽きさせない。

さて、本書は一五章からなり次のように構成されている。

- 第一章 前途多難なアメリカ外交
- 第二章 生い立ち
- 第三章 修業時代
- 第四章 第二次大戦と日本占領
- 第五章 朝鮮—戦争と和平
- 第六章 チェコスロバキア駐在時代
- 第七章 一九五四年のジュネーブ会議
- 第八章 中華人民共和国との最初の交渉
- 第九章 タイ駐在時代—ラオスでの戦いとSEATO (東南アジア条約機構)

第一〇章 政務担当国務次官代理時代

第一章 ベトナム駐在次席大使―一九六四―一九六五年

第二章 駐日大使時代

第三章 政務担当国務次官時代

第四章 SALT (戦略兵器制限交渉)

第五章 我々には何ができるか。

以上からわかるように、著者は戦後アメリカ外交の節目に立会っており、それぞれの項目を紹介するだけで一つの論文が書けるほどである。

本稿では、日米関係という観点から本書の内容を紹介することにする。ジョンソンと日本との関係は一九三五年にさかのぼる。また戦後五代目の駐日大使として一九六六年から一九六九年まで滞在し、沖繩・小笠原諸島返還に大きな貢献をしている。

(一)

一九〇八年、スウェーデン系移民の子としてカンサス州ファーレンに生れたジョンソンは、三年にカリフォルニアのオクシデンタルカレッジを卒業し、国務省を受験した。外交官の道を選んだ理由は、大不況の最中、年俸二、五〇〇ドルという破格の給料に心ひかれたためであったと彼は語っている。入省後ジョンソンは日本語を専攻した。これはオクシデンタルカレッジ在学中、一人の日本人学生と親しくなり、多少日本に興味を持っていたためであった。この日本人とは、後に極東裁判やサ

ンフランシスコ講和会議の通訳として活躍した島内敏郎である。ジョージタウン大学での研修を終え、一九三五年正式に国務省の一員となったジョンソンは、日本語を学ぶため東京に派遣された。第三章 修業時代では、次第に軍国主義の色彩強まる東京で、語学修得に苦勞しながらも日本人との交流を通じ、日本に愛着を持つようになったことが語られている。

当時、東京には『嵐の中の外交官』(朝日新聞社、一九七九年)を書いたジョン・エマーソンがいた。文人肌のエマーソンは、日本文化と接触するうちに近松門左衛門と文楽に傾倒していたが、ジョンソンは「生まれながらの日本人しか真の日本人にはなれない」と考え、日本とは一線を画していた。したがって「日本を好み、尊敬するが、恋に陥いる」ことはなく、あくまでも客観的に日本をとらえていたのである。

この後ジョンソンは一九三七年より、日本統治下にあった京城の副領事を経て、天津・奉天に移り、そこで太平洋戦争勃発を迎えた。戦前の日本で七年間過した経験からジョンソンは、日米関係は今こそ悪いが、レベルの高い両国の共存は可能であるとの確信を強めたのである。

第二次世界大戦中、リオデジャネイロ、さらにフィリピン勤務を経て、ジョンソンは終戦とともに在日連合軍総司令部に勤務するようになった。マッカーサーの下で在日アメリカ領事館を再開するため活躍し、横浜駐在総領事となった。敗戦のショックからすばやく立ち直り、親米的になった日本人の姿を見て、

ジョンソンの対日評価は一段と高まった。

一九四九年帰国以来、ジョンソンは北東アジア課勤務を経て、五三年チエコ大使になる。在動中は一九五四年のジュネーブ会議、および米中大使級会談のアメリカ側首席として活躍した。

五八年からタイ駐在大使となり、SEATO(東南アジア条約機構)理事会アメリカ代表となる。六一年にワシントンに帰り政務担当国務次官代理、六四年七月から翌年九月までベトナム駐在次席大使、六五年再びワシントンに呼び戻されてリンドン・ジョンソン大統領の下で政務担当国務次官代理となった。

以上、席の暖まる暇もないほどまぐるしく動きながらも、ジョンソンは着実に外交官の出世街道を歩み続けた。そして、アジア地域の安全保障問題に関してはアメリカでも有数の専門家に成長していった。

(三)

一九六六年一〇月、東京に到着したジョンソンは、日本の復興に目をみはったが、日米関係の現状を考えると手離しに喜んではいられなかった。

当時、日米両国間には経済と安全保障両面で摩擦が生じていた。驚異的な高度成長を続ける日本の台頭により、アメリカ経済の圧倒的優位は崩れつつあった。貿易面では、家電、繊維を中心とする日本製品がアメリカ市場に大量に流入したが、反面、日本国内市場の開放は遅れ、アメリカ国内には、日本はGATT

Tの精神に反する行動をとっているという非難の声が高まった。こうした動きは、保護貿易主義の台頭に結びつきやすく、日米経済関係の前途に不安を抱かせていた。

安全保障問題はより深刻であった。ベトナム戦争は激化する一方で、日本のマスコミはこぞって北ベトナムやベトナムに同情的であった。このため、当初は対岸の火事として関心の薄かった日本人の多くも、アメリカのベトナム政策に批判的になってきた。

こうした中で、ジョンソン大使は、長期的展望に立ち、「日本は東アジアの安全保障について責任を負うべき」であり、これはアメリカにとっても有利であると考えていた。具体的には、○沖繩・小笠原諸島の施政権返還、◎日本本土の米軍基地の将来、③アメリカのベトナム政策に対する日本人の理解を深めさせる、の三点に取り組んだ。

しかし、それ以前にジョンソンには解決しなければならない問題があった。それは駐日大使としてどのようなイメージを日本人に与えるかである。前大使ライシャワーは、ハーバード大学教授の肩書と日本人女性の妻という日本人の喜びそうな武器を駆使して、各層から幅広い支持を受けていた。

これに対してジョンソンは、スタンズプレリーが苦手であった。そこで日本知識人や社会党、総評などとのパイプは、日本の政治外交を専門とするコロンビア大学教授ジェームズ・モーリーを特別顧問に任命し、その継続をはかるとともに、語学の達人

オズボーンを公使とし、大使館スタッフを補強した。しかし、「大使は実務をきちんと処理することにより好評を勝ち得る」と信じて疑わないジョンソンは、自らの外交姿勢を「静かな外交」(quiet diplomacy)と評し、ライシャワーのようにマスコミに華々しく登場しようとはしなかった。

次にジョンソンが取り組んだのは、ライシャワー時代疎遠になっていた在日アメリカ軍との関係を緊密にすることであった。安全保障問題の解決には、軍関係者との連携プレーが鍵になると考えたジョンソンは、在日アメリカ軍司令官のマッキーや沖縄高等弁務官のキャラウェイ等とのパイプを太くするよう努力した。これが後に沖縄・小笠原諸島返還交渉の際、大いに役立つのである。

また、ジョンソンはこの他にも各界の実力者に会い、アメリカの立場をストレートに訴えるとともに、「経済大国となりつつある日本はもつと開発途上国、特にアジア諸国に援助しなければならぬ」と語り、日本人の自覚を促した。

前任者の良い点は取り入れるが、背伸びはせず着実に仕事を進めるあたりは、実務型外交官としてのジョンソンの面目躍如たる感がある。

さて、駐日大使時代最もジョンソンが努力したのは、沖縄返還問題であった。北爆がエスカレートする中で、在日アメリカ軍にとって沖縄基地の重要性はますます高まる一方で、アメリカ国内では国防省をはじめ、返還に反対する者が多かった。逆

に日本では「沖縄返還なくしては日本の戦後は終らない」と述べ、政治生命をかけて意気込む佐藤首相の下、返還運動は活発化してきた。

こうした状況下でジョンソンは、日米両国の間に立ち、返還の下準備を進めた。この時期の日本側の対応に関しては、すでに東郷文彦氏がその著『日米外交三十年』(世界の動き社、一九八二年)の中で詳しく述べているが、本書ではアメリカ側の対応が描かれ、実に興味深い。特に、一九六六年一月の佐藤・ジョンソン首脳会談の際、日本側から返還時期として「両三年」(within a few years)という語句を共同声明に盛り込みたいと申し出がなされた後、ジョンソンが大統領にいきなり腕をつかまれ、別室に入りこみ二人きりで長時間議論したくだりなどは、彼がまさしく「大統領の片腕」(the right hand of power)であることを物語るエピソードといえよう。

こうして沖縄返還交渉は軌道に乗ったかに見えたが、一九六八年に入ると足踏みせざるを得ない事件が続発した。一月には、韓国大統領暗殺未遂事件、プエブロ号拿捕事件、原子力空母エンタープライズ寄港とその反対デモが起きる。二月には、B52戦略爆撃機の沖縄配備に対する反対運動、三月になると、王子のアメリカ陸軍病院建設反対運動が激化する。そして五月には、原子力潜水艦の停泊する佐世保港内で放射能異常値が測定されるというように、ジョンソン大使にとっては頭の痛い事件ばかりであった。しかし、多くの難問に直面しながらも、日米関係

をより成熟したものにしようとする基本姿勢を崩さず、冷静に案件を一つずつ解決していく姿には感心させられる。

一九六八年は、日米両国にとって選挙の年でもあった。アメリカでは一月五日の大統領選挙でニクソンが選ばれ、日本では同月一〇日沖繩初の主席公選で屋良朝苗が選出、二七日には自民党総裁選挙で佐藤栄作が再選、改造内閣では愛知揆一が外務大臣となった。

沖繩返還がなされるまでタバコをやめると宣言し、意欲満々の愛知外相とジョンソンはすぐに意気投合した。六八年二月より六九年一月にかけて行なわれた愛知・ジョンソン会談では、返還後の沖繩の基地使用をめぐる日米の意見対立をどう調整するかが焦点となった。

ジョンソン大使としては「沖繩基地を『本土並み』にした場合、日本政府が事前協議に当たって政治的責任をとる用意があることを明示しなければ、アメリカ国内をまとめることは不可能」と考え、率直にその旨を述べた。これに対して愛知外相は「返還後も基地の『自由使用』をとりあえず認めるが、極東地域の安全保障に支障をきたさないと日米両国政府が認めた場合には『本土並み』に段階的に移行するようにしてはどうか」と新提案を出した。

この提案はジョンソンを勇気づけ、いよいよ話は佳境に入るかのように見えたが、突然ニクソン大統領より国務次官に任命するとの報せをうけ、急拠帰国せねばならなくなってしまった。

国務次官といえば、アメリカ外交官のだけれど、あこがれるポストであるが、ジョンソンにはそれほど魅力は無かった。「海外勤務こそ外交官本来の仕事」と考えていた彼にとっては、「駐日大使は完全に満足できるポスト」であり、「懸案の沖繩返還を自らの手で実現したかった」のである。

帰国に際し、ジョンソン大使は、天皇・皇后両陛下主催の茶会に愛妻パトリシアとともに招待された。陛下のにこやかな笑顔を見た時、「心から日本での滞在生活は成功したと感じた」と冷静な著者にしては珍しく感動しているが、その胸中は複雑であったと思われる。

本章で目を引くのは、ジョンソンが佐藤首相を高く評価している点である。とかく「待ちの政治家」と言われ、日本のマスコミでは必ずしも評判の良くなかった佐藤であるが、著者は「日本人にしては体格も良く、堂々とした政治家であり、かつ物腰柔らかで友好的な佐藤と一緒に仕事ができたと光栄に思っている」と最大級の賛辞をおくっている。日米関係を長い目で見ていこうとする二人の信頼関係の深さがうかがえる。

#### (四)

今まで日米関係を中心に本書の内容を紹介してきたが、本書全体の特徴は、ジョンソンが大局的見地から、戦後アメリカ外交の節目を実にわかりやすく説明していることである。全体を読破すれば、戦後アメリカ外交の大筋を理解できる良き啓蒙書

となっている。

惜しむらくは、アメリカの国内政治の動きがあまり述べられていないことである。しかし、当時の関係者の多くが、現在なお存命中であることを考えれば無理な注文かも知れない。

戦後アメリカの駐日大使の回顧録としては初代マーフィの『軍人の中の外交官―第二次大戦外交秘話』（鹿島研究所出版会、一九六四年）をはじめ、二代目アリソンの『大草原から来た大使―不思議な国のアリソン』（邦訳は出版されていない）、ライシヤワアの『日本への自叙伝』（日本放送出版協会、一九八二年）、マイヤーの『東京回想』（朝日新聞社、一九七六年）がある。本書は、先に述べたエマソン、アリソン、ライシヤワアの著書のよくな華やかさやユーモアは無いが、外交官生活から得た経験と自信に裏づけられたいぶし銀の輝きを持った回顧録といえよう。戦後アメリカ外交官や日米関係を研究する者にとって、またとない書が出版された。近い将来本書が邦訳され、多くの日本人に読まれることを切に望む次第である。

以上

（本書の詳細は筆者構成「ジョンソン元駐日米大使回顧録―沖縄返還を手がけて―」（『中央公論』一九八五年七月号）を参照されたい。）

木村昌人